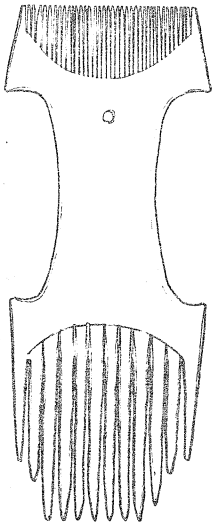
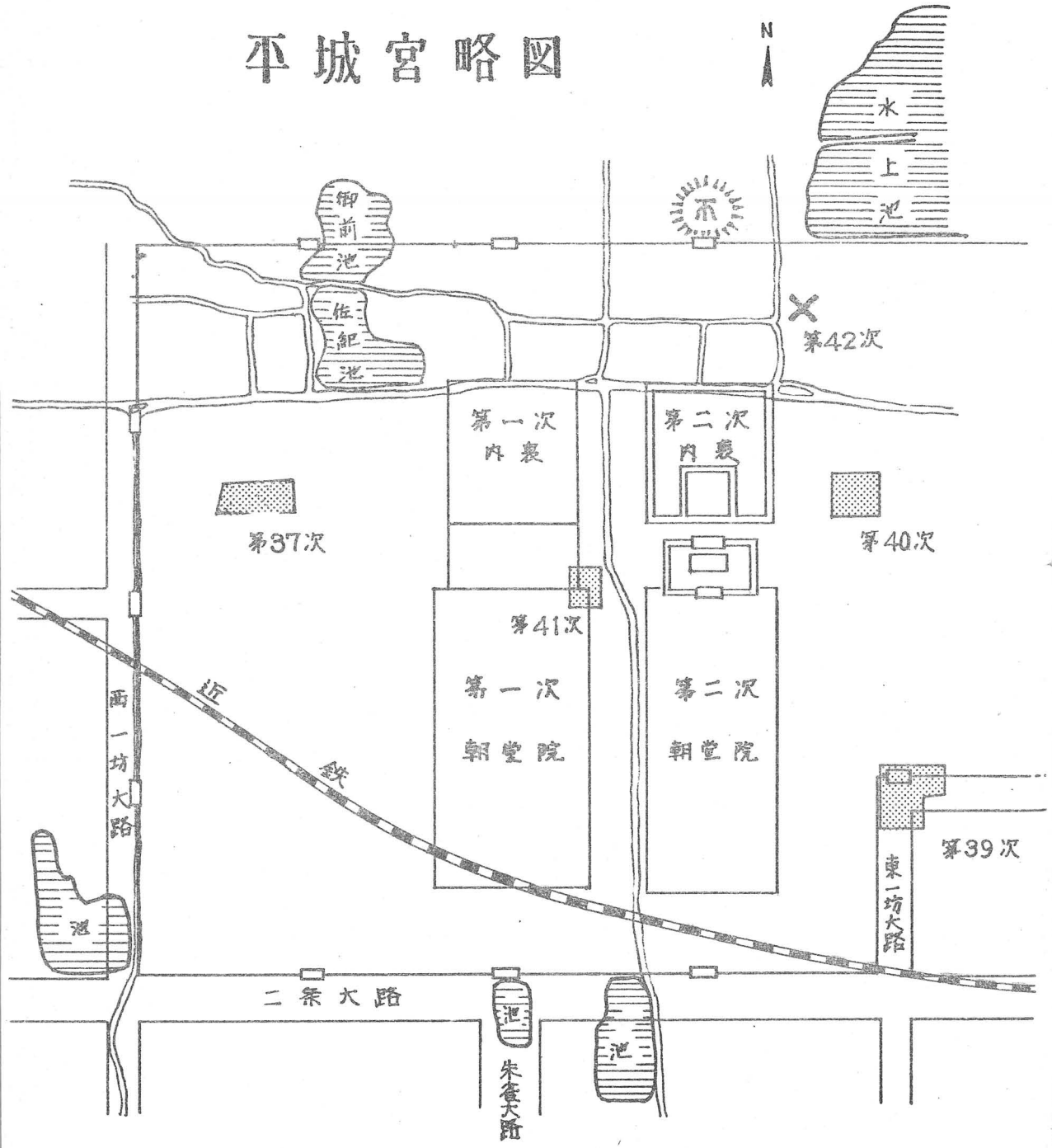
平城宮第37.39.40.41次発掘調査概報



昭和42年10月

奈良国立文化財研究所

平城宮略図



表紙カット

第41次調査出土 木櫛

平城宮第37·39·40·41次発掘調査概要

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が平城宮跡において継続的に行っている調査のうち，昭和42年度の当初より10月までの間に終了した5回の発掘調査について概要を報告する。

調査の回次と対象とした地域を列挙すると，第37次調査は宮跡の西部，第39次調査は従来東面南門と推定していた地域，第40次調査は第2次内裏外郭の東方，第41次調査は第1次朝堂院東部，第42次調査は第2次内裏外郭東北隅付近である。以下にそれぞれの概要を述べるが，第42次調査のみは，宅地現状変更にともなう小規模な調査であり，若干の溝と柱穴を検出したほか，言うべき成果を持たないので記述を省略する。

各次別の調査地区名・面積・期間は次表のとおりである。

調査次数	発掘地区	面積	発掘期間
37次	6ACP－C, F	43a	昭和42年2月6日 ― 昭和42年5月27日
39次	6ALS－C, F, I, J, G 6ALT－T, R	43.9a	昭和41年12月8日 ― 昭和42年5月26日
40次	6AAD－B	36.8a	昭和42年4月27日 ― 昭和42年10月3日
41次	6ABE－L, M, P 6ABR－Q 6ABS－A	40a	昭和42年5月27日
42次	6AAA－J	693㎡	昭和42年9月6日 ― 昭和42年9月13日

I 第37次調査

調査地域は，佐紀池南方にある小字「北垣内」に属する約43アールで，推定第一次内裏と西一坊大路のほぼ中間にある。

検出した主な遺構は，建物3棟，柵3条，溝2条，井戸1，橋1，礫

数1などである。

数条の柵と溝は発掘地域の南を東西に走り，この地域の南を限る性格をもつ遺構とみられる。掘立柱からなる柵は北からSA5270，SA5340，SA5260の3条がある。SA5270は柱間2.94m等間で，東西ともに調査地域の外におよぶ。SA5340は柱間，方向ともに不揃いで，東は調査地域外にのびるが，西は新らしい土坑で壊されていて不明である。南縁にあるSA5260は柱間2.77m等間で，東は調査地域の外におよび，西は調査地域の西端近くで終っている。

溝又条は，素掘の溝で，その両端は調査地域の外にのびている。北のSD5280は，幅は当初約6.5mであったが，後に北寄りに幅2.4mの狭い溝になる。3間の橋SX5330は狭い溝にかけられたものである。SD5275は幅約50cm，柵SA5270の南2mにあり，柵にともなう溝と考えられる。

建物その他の遺構はこれらの柵や溝の北にあった。建物3棟はいずれも調査地域の東半にある。東のSB5300は，南北棟10間以上×4間の東西廂付基壇礎石建物（桁行柱間4.2m，梁行柱間3m）である。基壇はすでに削平をうけてわずかにその痕跡をとどめているだけで，この基壇土上から柱列位置を幅約1～1.5m，現状で深さ約20cm前後を掘りとって布掘地業としていた。礎石はすべて失われ，根石がこの布掘地業上に残存していた。西側柱列の3m西に幅約70cmの素掘の雨落溝が残っていた。SB5310は，SB5300の西にあって東西棟8間×3間の南廂付掘立柱建物（桁行柱間2.75m，梁行柱間2.5m）で，北側の柱列と南入側柱列は東へ1間ずつ延びている。この建物の方位は，他の遺構とちがって東で北側にわずかにふれている。SB5290はSB5310の南にある東西棟4間×2間の掘立柱建物（桁行柱間2.2m，梁行柱間2m）で中央に間仕切りがある。掘りかたは小さく，不揃いである。

井戸SE5320は1辺1.4mの方形で，四隅にたてた支柱に上下2段の貫をわたし，外側から縦板を羽重ねにならべたもので，遺構検出面から1.3m下の底には径約60cmの曲物をいけ込んでいる。

調査地域西端近く，溝SD5280の北側に幅約4mの礫敷SX5333が南北方

向にある。

以上述べた遺構は重複せず、その年代決定は困難である。ただSB5300の基壇周辺とSD5280からは、藤原宮所用瓦と同絶の軒平瓦6641型式および興福寺式と通称される6301型式と6671型式の組合せの出土が顕著であり、おそらくこの建物と溝の造営は平城宮創設当初にさかのぼると推定する。柵SA5270はSB5300の梁行柱間と等しく、柱通りが揃っているから、これと平行する2条の溝とともにSB5300と同一時期の造営とみられる。井戸は出土土器からすれば奈良時代末か平安時代初期の可能性が大きい。その他の遺構の時期は推定できない。

今回の調査地域は第2次内裏周辺部と較べて遺構の数が少なく、重複していないことが特徴である。この地域は南は東西に走る柵、溝などで区画されているが、この区画は東約100mで実施した第28次調査地域では検出していない。桁行40m以上という宮内でも特に長大な建物のあるこの地域がどのような性格のものかは今後の周辺地域の調査によって明らかにされよう。

Ⅱ 第39次調査

第39次の発掘調査は、東面南門推定地の東側でおこなった。

この地域は従来、宮城東面の大垣に沿った東一坊大路と、東面南門からまっすぐに延びる一・二条間の条間大路とが「T」字形に交差する地点と推定していた区域である。ところが調査の結果は従来の推定に反して、東一坊大路は東面南門の推定地で条間大路と「L」字型に接続し、東一坊大路の突きあたりには南面する門が造られており、第29次調査で検出した東面大垣の途切れる地点から宮域が東方に張り出すことが判明した。

検出したおもな遺構は、基壇建物1棟、掘立柱建物10棟、柵3列、築地3条、溝12条などである。

○ 道路と溝

調査地域の西部を北から南に向って流れる溝SD4951（付図参照・以下

同じ）は，第32次調査で検出した宮城東外濠の延長で，幅約0.5mである。この溝のI・J地区にかかる部分は後に埋めたて，かわりに溝SD5100を設けて水流を西に迂回させている。しかし，この迂回溝はその角度が急なためか，まもなくゆるやかなSD5050に改修し，SB5000の南約4.5mの地点でもとのSD4951に合流するようにしている。このSD5050は，発掘区北端から約20mの間では溝底に径20～30cm大の自然石を敷きつめている。
これらの溝が分かれる部分では，時期を異にする6条もの溝が複雑に重なりあい，何度もの改修がおこなわれていることがわかる。溝SD5030は巾約0.5mの狭いもので第32次調査で検出した東一坊大路の東側溝に接続する。この溝と柵SA5010の延長の交点には瓦を使用した暗渠がある。溝SD4951とSD5030にはさまれた巾約20mの空間は東一坊大路の路面である。ただしJ地区の北半にはのちに述べる門SB5000があるので，東一坊大路はここで行き止まりになっていたと考えられる。

R地区北寄りの溝SD5174とD・G地区南寄りの溝SD5200は，いずれも溝SD5030の東約3mのところからはじまる東西溝である。この2条の溝にはさまれる幅約16mの空間には，とりたてていうべき遺構がないので，一・二条間の条間大路の路面と考える。SD5174の南側の幅約0.5mの東西溝SD5170は築地SA5173の東側に沿って南に曲がり，T地区を横断する木製暗渠SD4990で溝SD4951と通じている。

○築地と柵

R地区のSA5172とSA5173はいずれも地山面を高く残しており，築地痕跡と考えられる。巾は両者とも約3mである。C地区南端の築地SA5055は版築がよく残っている。この北側の溝は，この築地の北側の雨落溝と考えられるが，側と底に玉石を用いている。D地区からG地区にかけて柵SA5010があるが，これは溝SD5030の東側からはじまっている。これらの築地・柵をまっすぐ西に延長すると，第29次調査で検出した東面大垣SA4340の終る地点に連なる。

○門

J地区からG地区にかけての建物跡（SB5000）は後世の水流によつて

大きく破壊されているが，東部（G地区）に基壇の積土と根石の残った礎石据えつけ穴があり，西には転倒している礎石を2個検出した。東部で検出した積土は，東一坊大路の東端に位置するので西側ではすでに削りとられているが，東一坊大路の道巾いっぱいに築られた基壇建物とおもわれる。とすると，柵SA5010はこの建物の東側にとりついていたわけである。なお，I地区の東南隅には凝灰岩が東西方向に並んだ痕跡を検出した。これをこの建物の北の端と考えると，基壇の規模は20m×15mほどとなる。

この建物は，その位置からみて，東一坊大路の突きあたりに南面して建つ5間×3間ほどの門と考えられる。この建物跡の南側に掘られている土坑SK5104から，多量の桧皮のくずや，手斧などで削ったと考えられる建築用材のくずとともに「作門所」の文字が記された木簡が出土したことは，この推定を裏書きするものといえよう。

この門SB5000の存在と溝SD5100・5050が西に迂回することは無関係ではないと思われる。溝SD4951がまっすぐ南方向に通っていた時期にはまだこの門はなく，門の築造にともなって溝SD5100を設けて西に迂回させたものか，あるいは溝SD4951と併存していたが基壇建物という性格から，のちに溝5100・5050として西に迂回させたものであろう。いずれにしても，この問題をつきつめて考えるためには，溝SD5100のつくられた時期が重要な意味をもつ。その時期を正確に限定することはできないが，I地区からJ地区にかけての溝で出土した木簡の年紀は，溝SD4951では養老，神亀などであり，溝SD5100では神亀，天平勝宝，天平宝字などがあるところからみて，溝SD5100の上限を神亀年間におさえることも可能であろう。

○その他の建物

建物跡は，F地区において検出した7間×3間の倉庫ふうの建物SB5048がある。R地区では4間×2間東西棟（SB5149），5間以上×2間（SB5148）・7間以上×3間東廂つきのもの（SB5151）いずれも南北棟の建物2棟，4間以上×3間以上北西廂つき，棟方向不明のもの（SB5150）

合計4棟が重なりあっている。このほか，南面塀地上で小規模な建物跡を数棟検出した。

さて，以上のことから第39次の調査地域は，東一坊大路が東にのびる条間大路と「L」字形に接続して終末点になる個所であるといえる。東一坊大路は築地の心心距離が約12丈（約35m）あり，塀地は第14次，第32次の調査で確認したものと同様約10mの幅をもつ。条間大路も築地の心心距離は約12丈ほどであり，溝SD5200の北側は約10mの空間をもつものでやはり塀地と考えられる。

これらのことから，従来方八町と信じられていた平城宮の規模は，東面南門推定地であったこの地域から東へ張り出していたことが認められるのである。また築地SA5172・5173は左京二条二坊三坪の西北の隅である。

出土遺物は，瓦・土器が主要なものであるが，木簡もおよそ250点出土している。出土木簡のうち主なものは次の通りである。

(1)
「----便従小子門出入之」
「----正六位上行大尉船連船主」

(2)
「常陸国那賀郡日部郷戸主物アヲ大山戸口日下部奈万呂養」
「鉈六百文　天平寶字四年正月廿日」
(ママ)

(3)
「若狭國遠敷郡木津郷小海里土師竈御調塩三斗」
「神亀五年九月十五日」　」

(4)
「務所牒　作門所　庭四五人匠丁四　右充彼所」
「少録船連　「鈴末呂」八月廿八日付委文末呂」

Ⅲ 第40次調査

調査地域は第32次内裏外郭の東方，第38次調査地域の南に接する36.8アールの範囲である。

宮がつくられる以前，この地域は東南に向うゆるやかな傾斜地であったが，宮の造営にともない，地盤の降る東南部に，2回にわたって盛土による整地を行っている。検出された遺構は，第1回の整地面にあるもの（A期），第2回の整地面にあって重複関係から年代のさかのぼると考えられるもの（B期），おなじく第2回整地面にあるが年代の降るもの（C期）の3時期に大別することができる。つぎに各時期の遺構の概略を述べ，この地域における造営の消長をたどることにする。

A期　第1回の整地面に造営を行った時期である。この際の整地は不完全なもので，地表にはなお，ゆるやかな傾斜が残っていた。発掘区の西縁では，のちの築地SA2746の下層から南北柵列SA2940が検出され，またそれにとりつく東西柵列SA4876も第38次調査で見出されているが，この地域全体がどのように囲いこまれていたかは明確でない。この時期の建物はすべて掘立柱建物である。今回の調査で検出した3棟のうち2棟は東西棟で，発掘区の中央北端に柱通りをそろえて南北に相対する。規模から見て，北の7間×4間南北廂建物SB5400（桁行2.7m，梁間2.7m）がこの地域の主屋であり，南の7間×2間の建物SB5410が付属棟であると見なされる。残る1棟は上記2棟の東南にある東西棟13間以上×2間の建物SB5350である。この建物は梁間3m，桁行柱間は不揃いで，北より2間目と10間目が3.9m，その他は2.9mとなっている。

上記した3棟の建物は，第38次調査で見出した掘立柱建物SB4860，SB4870と同一整地面上にあり，同時期の造営と見てよい。

B期　第2回の整地面に博積基壇建物が建ちそろい，この地域が最も整備された時期である。この際の整地によって地表は，はじめて水平に整えられ，その結果として，南方の地盤の低い地域（未発掘）との間に，明瞭な段が設けられた。

今回の発掘地域と第38次調査地域の南半とが，4面を築地SA2746によって劃され，東西64m南北79mの矩形をしたブロックが形成される。

築地SA2746は，西南，北面及び南面の西半部に連続したコ字形に塼敷があり，建物雨落溝，歩道をかねている。うち西北部分は片廂廊となる。

この築地にかこまれた一劃への出入口としては，南の中央に正門SB5340があり，西に門SB5450，北にSB4909がある。

正門SB5340は南縁を削平されているが，3間×2間で，梁間2.1m，桁行柱間は両脇柱間2.5mに対し，中央柱間3.9mと中央間が広い。門の北側雨落溝SD5420（幅0.6m）は通常とことなり，門の基壇にそう部分が，門の方に向って入りこんでいる。西門SB5450は柱間2.8mの小規模なもので，礎石と唐居敷を1石で兼ねたもの1対が残っていた。

南面の正門の内方には，塼敷舗道SX5401が輿に向ってのびている。舗道は平行した3条（各幅2m）からなり，門に近い個所で東西の舗道により連結される。この舗道の西側にも，似かよった舗道SX5411が残存している。3条から成る舗道SX5401の中央の条は，このブロックの南北中軸線に対し対称の位置に配されており，全体として計画的な造営のあとが認められる。

舗道SX5401の行きつく先に，塼積基壇建物SB4880（南北13.5m，東西不明）があり，その西方，築地片廂廊ぞいに塼積基壇南北棟11間×2間の建物SB4890（桁行2.4m，梁間2.5m）がある。いずれも，第38次調査で北部を検出していた建物であるが，今回の発掘で，その規模をほぼ知ることができた。

今回の発掘では，新たな塼積基壇建物の存在を確認できなかったが，溝SD5355と東面築地，溝SD5435と西面築地の間にある空地には，痕跡を失った建物があった可能性を考えてもよかろう。

建物以外の遺構としては中央建物SB4880の東方で井戸SE4866を発掘した。井戸枠は1辺1.5mの正方形井籠組15段分，深さ4mが残存していた。井戸の周囲には玉石を方形に敷きつめ，東側に玉石と塼を用いて長方形の洗い場のような設備をつくり，排水は東面築地の内側を走る玉石積

溝SD4850に導いている。

C期　38次発掘調査概報にE期とした時期に合致する。この時期に属すると確認できる遺構はきわめて少い。

築地SA2746はすでに廃絶し，玉石積溝SD4850も埋め立てられている。東縁にはSA2746のあとに築地5342がつくられるが，それがこの地域を一周していたかどうかはわからない。

確認できた建物は小規模な掘立柱建物SB5395，5396の2棟にすぎない。そのほかには柵SA5345，5350および小柱穴群があるのみである。

出土遺物には多量の瓦，塼，土器がある。
軒瓦は6135，6688型式が大多数を占める。塼は長方形，正方形の2種があり，「私事」，「公事」の線刻あるもの，緑釉を施したものもある。なおC期の土坑から風字硯が，井戸から木製品（下駄，櫛，曲物），隆平永宝，銅鈴が出土した。

Ⅳ　第41次調査

第41次発掘調査は，第1次内裏・朝堂院推定地域の東部，第27次発掘調査地域の南方に接する40アールの地域でおこなった。さきに「平城宮発掘調査報告Ⅱ」では水田区画にのこる地割から朱雀門正面の中央に第1次内裏・朝堂院があり，のちに東の中壬生門内方の第2次内裏・朝堂院に移ったと想定した。この想定では当発掘地域は，大極殿回廊と朝堂院回廊との接合部にあたるところである。宮造営以前のこの地域は，東南方向にさがる低湿地らしく，地山には腐植土風の黒色土が広がっている。この低湿地を埋めて，厚いところで1mほどの整地盛土をおこなっている。

検出した遺構は想定した大極殿回廊の東南部にほぼあたる位置にあるL字形の築地回廊と，朝堂院回廊位置でその東南隅にとりつく形に検出した築地がおもなもので，この地域全体の東を限る位置に南北の溝があった。

築地回廊は幅9.5mの基壇をもっている。基壇は中央部約2mを残して

両側を掘りこんで基壇土を盛り上げている。基壇の両側には築掘りの溝を検出した。この基壇はのちに拡幅されて，幅1.5mのものにあらためられている。この拡幅されたときの基壇にともなうものとして，根固石の残る礎石痕跡6個所と雨落溝を検出した。礎石痕跡によると柱間は桁行1.5尺，梁行2.5尺と復元できる。梁行柱間が大きいから中央に幅5尺内外の築地があつたと考えている。拡幅した東面築地回廊の東半には南北の柱間1.5尺の掘立柱列がある。これは後述する暗渠の改修工事との関係からみておそらく，さらにおくれた時期に東面回廊の東半のみを改修したものと考えている。この回廊の東南隅では雨落水を処理するための溝が数度にわたつて修復され，復雑な状態で検出された。まず基壇拡幅後南に木樋暗渠（1）とその延長部の開渠（2）が設けられた。ついで東南入隅から東へ木樋暗渠（3）が埋設された。この暗渠は築地回廊東側通りの掘立柱列の廃絶後に作られていた。この暗渠（3）が廃絶した後その北に木樋暗渠（4）と開渠（5）が設けられた。これらの溝はすべて東の南北溝に流れこんでいる。なお東面築地回廊上と両側の雨落溝下には南北小柱穴列6列があつた。造営時の足場穴かとおもわれる。

東面築地回廊の東約8m，発掘区の中央付近に南北方向の溝がある。この溝は整地層上から掘られており，幅2～3m，深さ1mほどで，溝中から「和銅」の年号をもつ木簡削屑が瓦などとともに出土している。

この溝の埋設土上で築地回廊東南隅にとりつく築地を検出した。築地は削平されているが，残存部から推定すると基底幅5mほどで東へ11mいつて南折し，ほぼ20m分を発掘した。南折部の東側で凝灰岩底石痕跡のある雨落溝が残っていた。この築地は南北方向の溝の埋没土との関係からその築成は築地回廊の造営よりおくれている。

東限にある南北溝は幅2～3m，深さ1.5mほどで，南端近くではこの溝にかかる橋を検出した。この溝の掘鑿によつて東半を破壊された土坑から霊亀元年の年紀をもつ木簡断片が出土しており，南北溝設置の上限が推定できる。

この南北溝の東では小柱穴からなる掘立柱建物6棟と東からこの溝に

流入する東西溝2条，ならびにその両肩にある掘立柱柵を検出した。発掘区の東南隅部分にはこの2条の東西溝と築地回廊からくる溝(2)および東西棟掘立柱建物を埋設する状況で別に盛土整地がなされていた。

築地回廊・築地は平安時代には削平されており，両側に壁土が散乱している。東限の南北溝はこの頃まで存続している。この西には幅1mほどののちの溝がある。

遺物には木簡・瓦・土器・木製品などがある。出土遺構との関連で注意すべきものをあげよう。東限の南北溝と溝(5)との合流点からは，中衛府兵衛府関係や続日本紀の記載と内容の一致するもの，神護景雲3年の年紀をもつものなどの木簡が出土している。また，開渠(2)の堆積土中から和銅開珎23枚が出土し，暗渠(1)の木樋埋設土中からは藤原宮跡出土瓦と同笵瓦の出土が顕著であり，開渠(2)を埋没した土からは第2次朝堂院所用の6225・6663が多く出土した。中央の南北方向の溝からは先に述べた木簡と6282－A・6306・6664－Cの軒瓦が出土している。

総延長90mに及ぶ木樋はすべて柱の転用材などで，柱の旧仕口に埋木して用いている。木樋暗渠(4)の外は全て矩形断面としてくりぬき桟を渡して蓋を受けている。他に南北溝から飾鞦や円座が出土している。

今回の調査によって，北接する第27次調査では遺構の保存状況が悪かったため不明確であった築地回廊の存在が確認できた。この築地回廊はさらに北にのびるらしく，かつて6ABO区の第2・4・7次調査で検出した石敷溝SD130はこの築地回廊の北面廊の南雨落溝であり，6ABO区東南隅にあった門SB269は東面築地回廊の東側柱通りに位置する掘立柱列の北端にあたるものと推定できる。これによって築地回廊にかこまれる一郭は，おそらくこれまでの大膳職推定地の南半にまでおよんでいたことになる。

なお，この調査は継続中であり，この報告は中間概報であって，最終的な結論は調査完了をまたねばならない。

最後に出土木簡中おもなものをあげておく。

(1)

「式部大□〔輔大伴益立〕　伊賀守伊勢子老　遠江介藤井川守□　周防守弓削秋万呂　出雲□□（部カ）勢（人名）（介カ）
内倉介安□草万呂（部カ）　美野守石上息□（爾カ）　伊与守高□蔵□（圓カ）（忠カ）　下総夏外□　常陸王□」

(2)

「下野介當□□〔麻王〕　□□守田マ息万呂（伊　伎カ）　□　□介弓削□
能□（登カ）〔守石川〈麻呂〕　左馬司頭牟□□王（部カ）（支カ）　□□介□〔伊豫カ〕
夏外介□□　□（弓カ）〔削薩摩〕　右衛士督備泉（吉成カ）　玄番□相模□　□（汝カ）」

「……衛府移中衛府　一番正八位下□　□」

「……□□故移　」

(3)

「……□（安カ）衛府移中衛□（符カ）……」

(4)

「請縄叁拾了　右為付御馬并夜行馬所請　」

「如件　神護景雲三年四月十七日番長非浄濱」

(5)

「造花所　□□人　□（請カ）飯参斗陸升　」

「　六月六日雀部石麻呂　」

(6)

「……請食　石寸建万呂作日朝夕者　」

「　四月廿四□□□東万呂□（付カ）　」

(7)

「蒸鞄壹籠〻別卅□　」

(8)

「薄鰒卅七斤五編　」

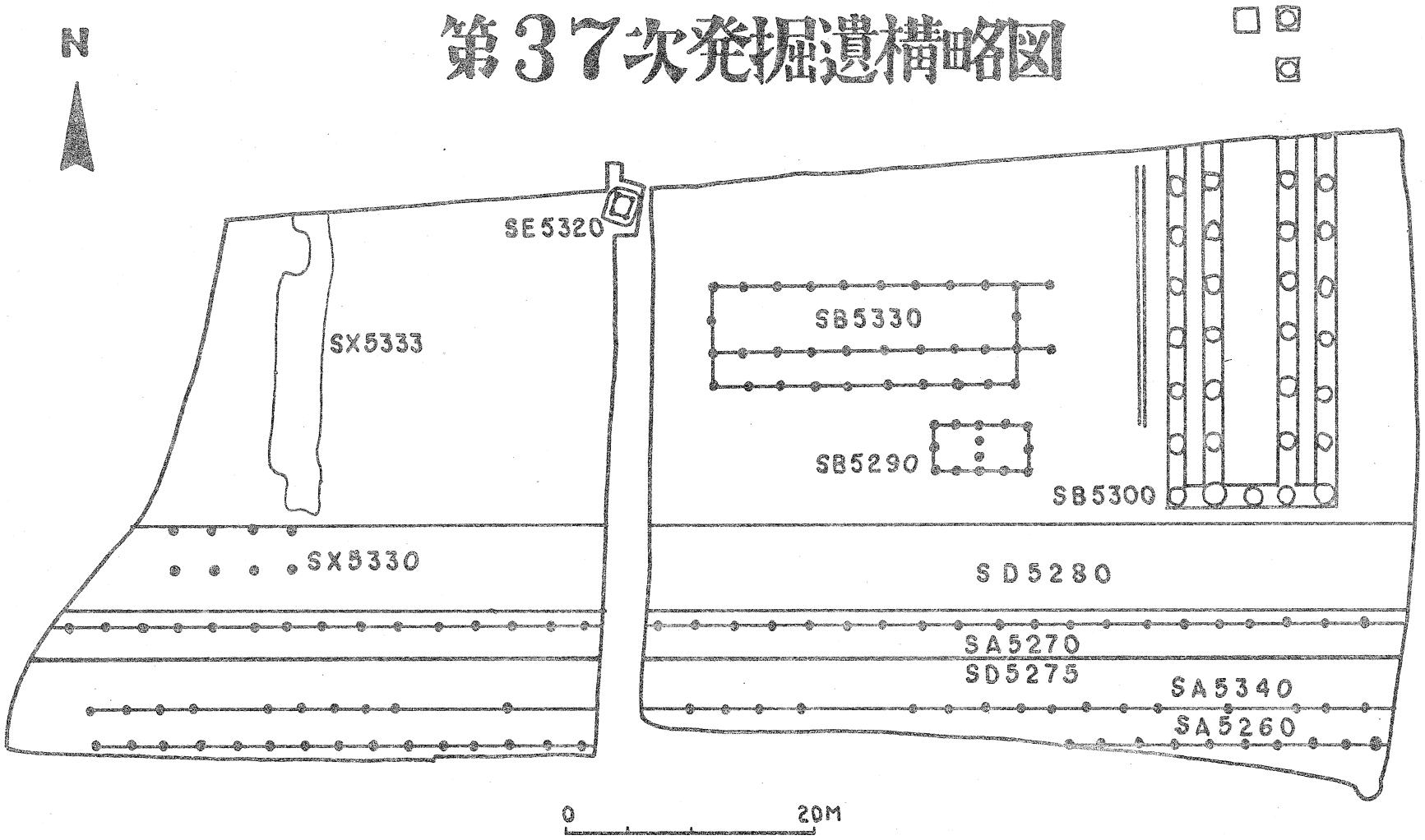
(9)

「蘇甲羸炙作鮀一橋　」

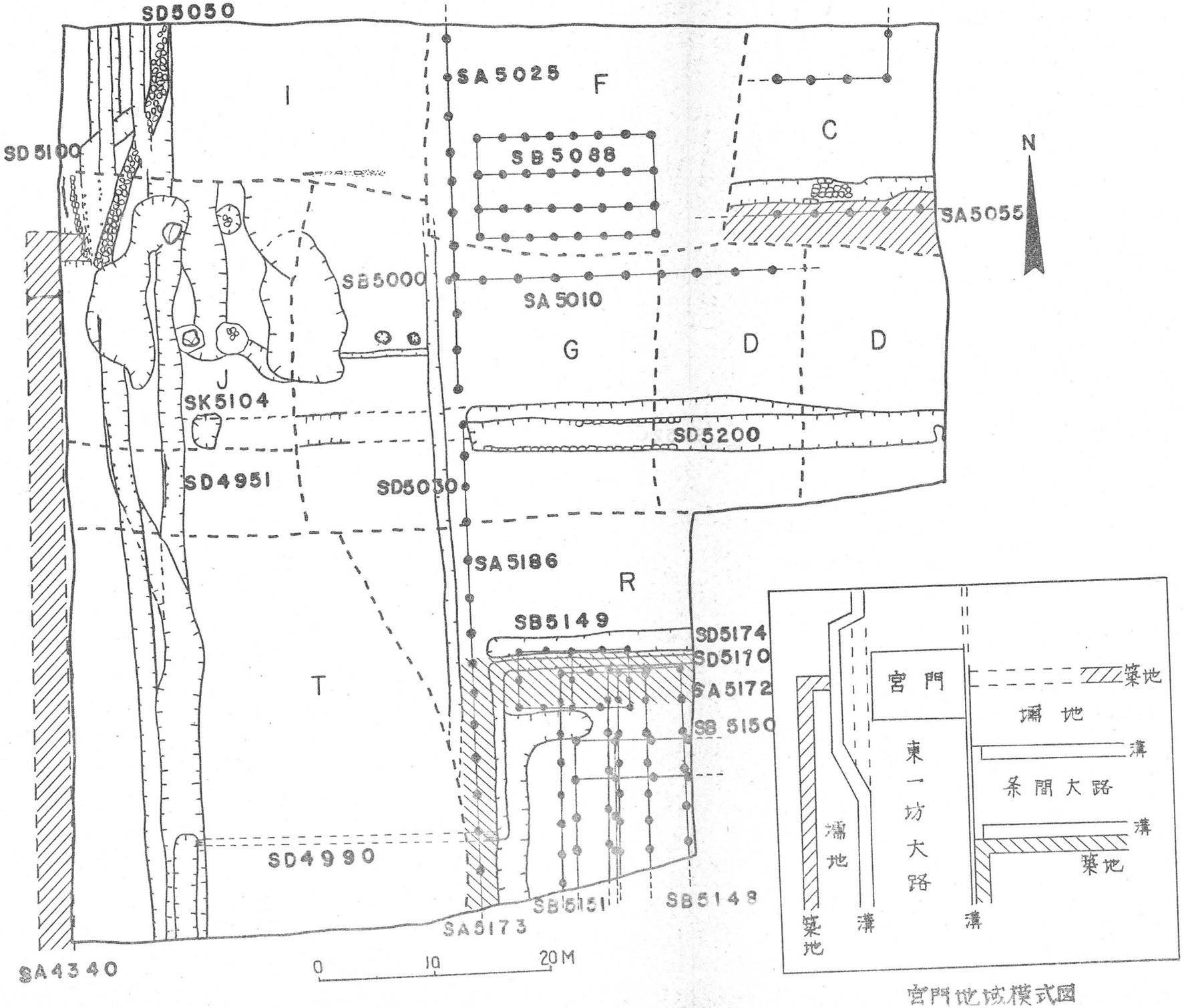
(10)

「雑魚焚剖一籠　」

第37次発掘遺構略図

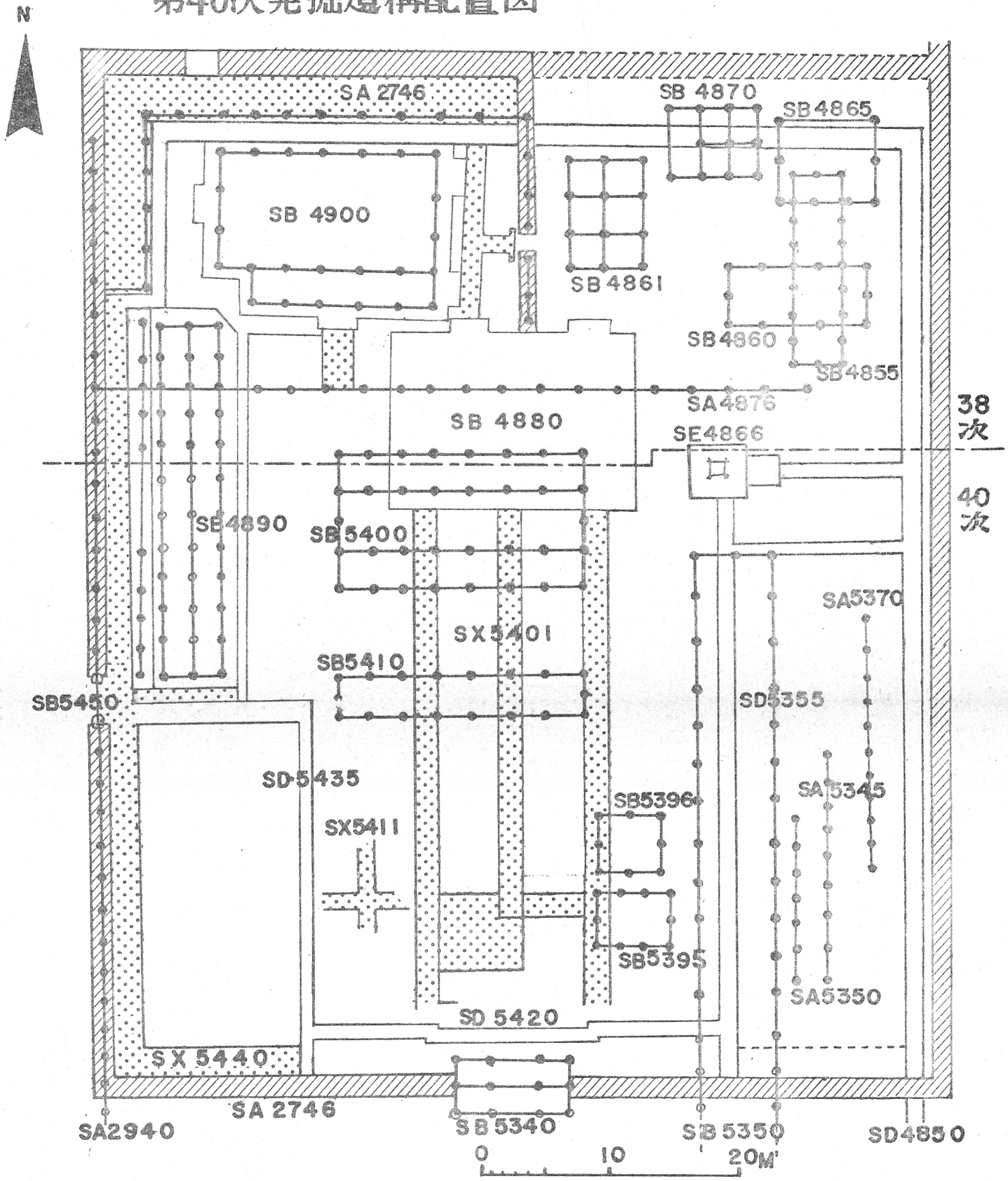
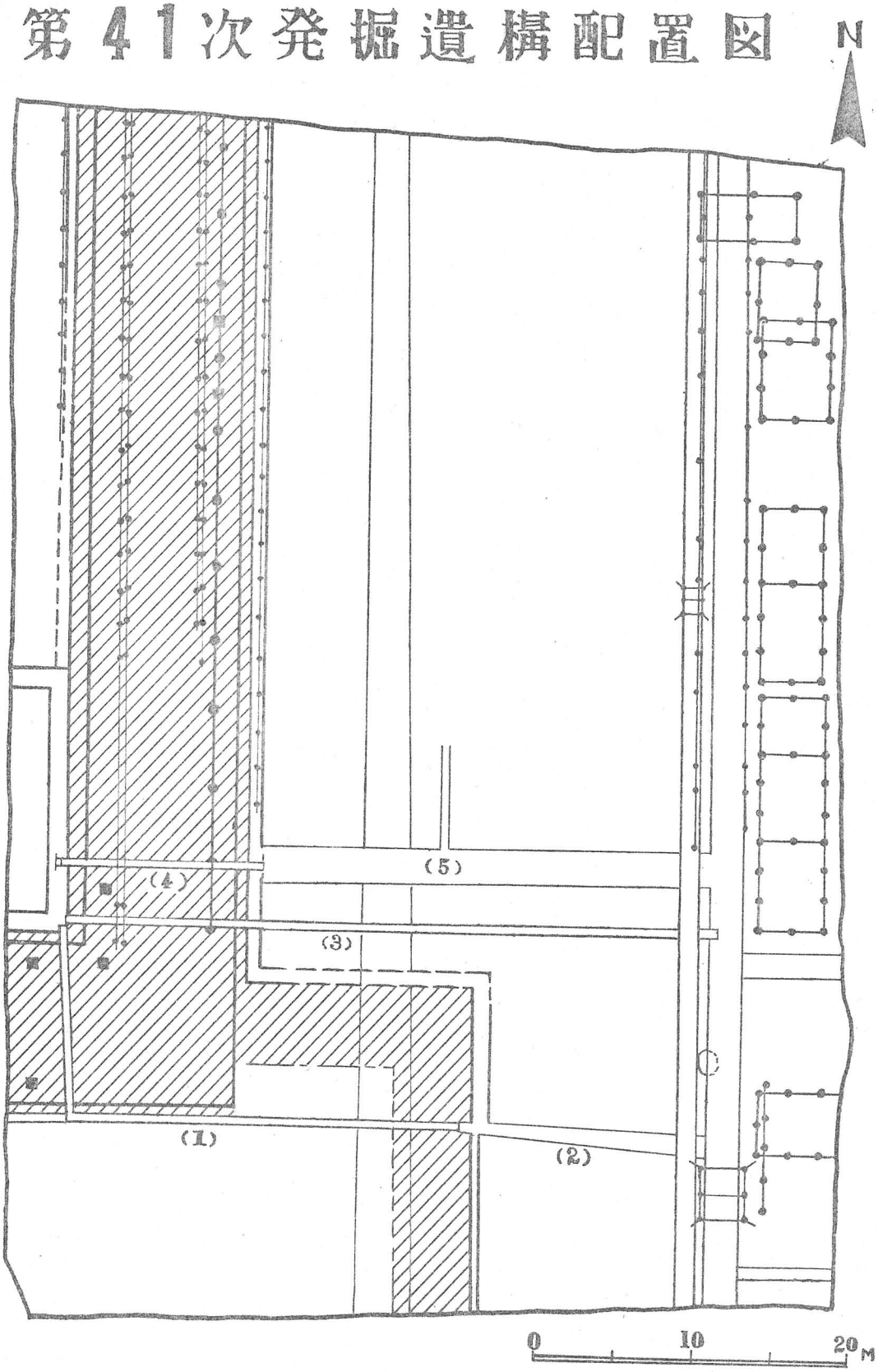

N
SE5320
SX5333
SB5330
SB5290
SB5300
SX5330
SD5280
SA5270
SD5275
SA5340
SA5260
0
20M

第39次発掘遺構配置図



宮門地域模式図

第40次発掘遺構配置図



第41次発掘遺構配置図